様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18530392
研究課題名（和文）脱スティグマ化とノーマライゼーションの文化的・相互行為的条件の研究
研究課題名（英文）
A Cultural and Interactional Study on Destigmatization and Normalization

研究代表者
中河 伸俊（NAKAGAWA NOBUTOSHI）
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：70164142

研究成果の概要：
スティグマのノーマライゼーションのために利用可能な知見を、相互フィードバック的な共同研究を通じて蓄積した。中河は成員カテゴリー化の状況内実践の基盤を理論的に解明し、田間は不妊のスティグマ化の文化的前提を歴史的に明確化した。宮脇はエチオピアにおけるＦGCのスティグマ化のダイナミズムと政治を可視化する作業を行い、工藤は「ひきこもり」の社会問題化過程とそこで用いられた学知について斬新な知見を提示した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	720,000	4,220,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：スティグマ、ノーマライゼーション、不妊、FGC、ひきこもり、カテゴリー化

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 16～17 年度にわたって、科学研究費補助金を受けて行なわれた共同研究、「スティグマの相互行為的マネージメントと文化的構成の研究」の成果を踏まえたフォロウアップ研究として企画され、研究分担者を新規に１名加え、個別的かつ多様なスティグマ現象を相互に関連付けながらの堀下げを、文化的および相互行為的な脱スティグマ化（ノーマライゼーション）の方途にとくに目を向けるという方針に基づいて立ち上げられた。

２．研究の目的

(a)スティグマ現象についての理論研究（中河）と、(b)不妊（田間）、(c)エチオピアの少数民族におけるＦGC（女子割礼／女性器切除）問題（宮脇）、(d)ひきこもり・登校拒否（工藤）という個別具体的な現象についての研究とをフィードバック的に進めることを主軸に、多角的に研究を進め、スティグマ現象のより深い理解と、根拠薄弱なスティグマの消去・抑制のために利用可能な方策や技法を明確にすることが、この共同研究の目的で

ある。

３．研究の方法

中河は、構築主義および相互行為論の立場からのスティグマ現象の理論的研究（理論文献の収集とクリティーク、そして新たなパースペクティブの創出の試み）に重心を置きつつ、並行して、地方都市における障害者介助の NPO のフィールド調査も行なった。田間は、出産に関わる事象を中心にスティグマとノーマライゼーションの観点から研究を行なった。第一に戦後の家族計画運動に関する聞き書き及び資料調査を行った。第二に国際比較研究のためのパイロット調査を韓国で行なった。これは、日本に数年遅れて軍事政府が展開した家族計画運動による少子化政策の結果への国家的対応として、韓国において多数の移住女性によって担われている再生産労働(出産・育児・家事・介護)の問題に関わる調査である。その成果の一部は、後述するように高齢者介護に関する国際シンポジウムとして結実した。第二に、出産については他の外部資金によるスウェーデンでのパイロット調査も援用しながら、資料収集と分析を行なった。第三に、不妊に関して刊行された体験記・医師等医療従事者による刊行物・不妊カウンセラーの言説を分析し、不妊と出産の社会的意味付けを考察した。

宮脇は、宮脇はエチオピアで少数民族ホールのフィールド調査を行いそのデータを分析するとともに、現地で収集した政府と NGO のパンフレット類の言説分析を行なった。工藤は、主にひきこもりについて聞き取り調査や参与観察を行なうとともに、この現象についての政策動向や統計調査の二次資料の分析を行なった。

また、随時相互の知見をフィードバックしあう合同セッションを開いただけでなく、四人共同のプロジェクトとして、スティグマ現象の理解を豊富化するのに貢献する成果を挙げつつある研究者（佐藤裕富山大学助教授、佐藤哲彦熊本大学助教授、天田城介立命館大学助教授、倉本智明東京大学特任講師ほかーいずれも所属・職階は当時ー）をゲスト報告者として招いて、期間中に計７回の公開シンポジウムを開催、さらに、高齢者ケアと女性のスティグマ化をテーマとする韓国・梨花女子大学と連携した国際シンポジウムを、大阪府立大学の女性学研究センターと共催した。

４．研究成果

中河は、理論面では、スティグマ現象の文化（集合表象）レベルでの研究の有力な補助線の一つである社会問題への構築主義アプローチの進展に資する共編著を公刊するとともに、エスノメソドロジーや会話分析の知見をも併せて援用して、スティグマ誘発的カテゴリーを用いたカテゴリー化が実際に排除的な相互行為をもたらすに至る諸条件についての検討を深めた。その検討は多岐にわたるが、そのうちの一つは、エスニック・カテゴリーなどの「他者」カテゴリーを使ったスティグマ化と排除は、近代的な都市社会では、オートマティックに起こるものではなく、相互行為における実践の「あたりまえさ」の破れ目にいわば寄生するかたちで顕在化するという、ロールズとデイヴィドの事例研究を通じた指摘を掘り下げる方向で行われた。ロールズらは、ドラッグストアでの店主とおお客のやりとりの状況内実践が、互酬性を失ったときに他者カテゴリーが了解可能性（アカウンタビリティ）を実現するためのリソースとして援用され、相互的な他者化とスティグマの貼り合いが現出することを示した。これは、本研究の実践的関心からすれば、相互行為上の互酬性を維持するためにさまざまな状況内的手段を駆使することこそが、スティグマのノーマライゼーションにとって決定的に重要だということの証左である。そうした状況内的手段（方法）を同定するには、エスノメソドロジー的なビデオ分析・会話分析の成果のさらなる精査が必要である。いま一つの中河の検討の領域が、成員性カテゴリー化と動機の帰属の相互反映的な関係の検討である。具体的には、昨年の「元厚生省事務次官等連続殺傷事件」のメディア報道の資料を分析し、「わけのわからない動機」が容疑者のカテゴリー化のあり方をあいまいなものにして、スティグマ化の様態を不透明にする経緯を分析した。こうした理論的検討の成果は、近日刊行される予定である。

いっぽう、障害者介助の NPO のフィールド調査においては、この NPO が、身体障害者の解放（および地域自立）運動から、障害者介助のＮＰＯに転進したという経緯のために、組織内に一定のきしみがあるという経験的知見を得た。運動の時代にリーダーシップをとった障害者の活動家が、現在ＮＰＯの運営責任者でもあるが、本人とこの団体の双方が介助提供の日常的業務に追われ、根源的なノーマライゼーションを求める告発型運動を積極的に行う余裕があまりなくなったという状況認識が、組織内のきしみの一因になっている。こうした組織状況は、このＮＰＯだけでなくかなり広く見られるきわめて重要な研究課題だが、事柄の微妙さのゆえに、ただちに知見を公表していいのかどうか、慎重な検討が必要だと思われる。

田間は、家族計画運動に関して単著を刊行した。続いて、上記（３．で）の韓国調査過程で、「ケア」というキーワードで日韓の社会を捉えなおすという視点を得た。すなわち、すべての人間が生きることにおいて何らかのケアを必要とする社会的弱者となるの

であり、そのノーマライゼーションを可能にする行為がケアだという視点である。この視点の成果は、特に高齢者ケアに焦点をあてた国際シンポジウムとなっている(上述)。

また、妊娠・出産についても同様の視点により考察した。妊娠・出産は、日本では女性の正常な生理的出来事であるとされ、不妊がスティグマ化されている。しかし、妊娠・出産が同時に労働市場から女性を排除・差別するスティグマ的理由となっており、医療制度においては医師中心の病理的取扱いが増加している。そこで、妊娠・出産自体をノーマライゼーションの観点から捉える試みとして、その社会的意味とそれを介助する助産師の社会的地位に着目し、研究会(招聘)で報告するとともに、論文「出産のノーマライゼーションと助産師」を刊行した。

宮脇は、その調査結果の分析から、大略以下のような知見を得た。宮脇の調査地域であるエチオピア中部のオロモ人居住地区Akaki wereda では、女性性器切除を受けていない女性は、女性に必要である適切な立ち居振る舞いができないと考えられている。そのような女性は、この地域ではスティグマをもつことになる。NGO の行なう廃絶運動は、女性性器切除を受けていない少女をシェルターにかくまう一方で、切除を受けていない状態を、脱スティグマ化することを目的としている。それは、１）女性性器切除に対する意味づけを、「真正な伝統」から「忌むべき有害な伝統」に転換すること、２）「伝統」を支える在来の知の体系を、根本的に変革すること、から成っている。

１）「真正な伝統」から「有害な伝統」への意味づけの転換は、女性性器切除を、婦女子の略奪という、現地住民にとっても忌むべき行いと同様なものとカテゴライズし、地域の集会などを通して、そのような伝統の再カテゴリー化を浸透させようとすることにより達成される。それと同時に、女性性器切除による身体への有害な影響を、キャンペーンを通して女性に教え込もうという試みがなされている。これによって、幾人かの女性たちは、女性性器切除の身体に対する影響を、「事後的に」知ることになったと語る。２）在来の知の体系の解体と再構築は、学校教育の浸透をはかることによってなされる。NGO は、Akaki wereda の各行政地区に、国際NGO や外国政府の援助を受けて、初等学校を建築し、地区の子どもたちを学校に通わせることで、女性性器切除を伝統の一部と考える知の体系から引き離そうと試みている。学校では、オロモの年齢階梯制のような「伝統」が、民主主義的な「よき伝統」とされる一方で、女性性器切除をはじめとするいくつかの伝統が「有害な伝統」として教えられる。学校の建設と平行して、NGO に協力的な地区においては、花卉栽培などの新たな換金作物栽培の導入などが試みられており、それが「有害な伝統」の廃絶のための、経済的なインセンティブともなっている。

NGO の試みは、女性性器切除を行なう社会における、スティグマの「脱スティグマ化」の試みと言えるかもしれない。だがそれは、ノーマライゼーションの試みとなっているわけではない。NGO の活動においては、それまで自明のものとされていた「性器切除を受けていること」が、後進性の象徴とされ、新たなスティグマとなる。このことが、女性性器切除廃絶や学校建設がいくつかの地域において抵抗を受け、かならずしもこのNGO のもくろんでいるほどに順調に進んでいない理由の一つだと思われる。またエチオピアのエスニック状況が、廃絶運動に大きな影響をおよぼしているのも、重要な点である。エチオピアは現在、民族自決を旨とする連邦制度をとっており、NGO の活動する Akaki wereda はオロミア州というオロモ人の民族州である。「有害な伝統」に対置される「真正な伝統」は、「オロモの伝統」に位置づけられる。廃絶運動は、政治的な民族の定義と軌を一にしている。さらにこの NGO のとる廃絶戦略は、エチオピア政府の「有害伝統廃絶」の運動を範例としていることも重要である。Akaki wereda に見られる状況はエチオピアの他地域で行なわれている女性性器切除廃絶の状況と、多くの共通点をもっている可能性がある。

工藤は、ひきこもりについての共著を刊行し、この現象のスティグマ化の過程の輪郭を明らかにするとともに、社会問題の構築や医療化等の観点から、スティグマ化と脱スティグマ化の意味論的重層性を明らかにした。

「ひきこもり」が社会問題化された過程においてキーワードになったのは、それ自体も極めてスティグマ性が高い「犯罪」および「精神病」というカテゴリーだった。

そもそも「ひきこもり」は、それに関わってきた専門家や民間支援団体の人の間においても、特定の状態としてのイメージを結びにくいものと考えられてきた。歴史的にみれば、「不登校」状態にある一部の子どもたちに類似の状態が存在することはすでに 80 年代後半から指摘され、その対処が求められていた。それにも関わらず、行政は明確な対応をしてこなかったという事情があったのだ。その理由は、同時期における「不登校」問題について、わが国で力をもった「不登校の親の会」の主張が「不登校」の脱医療化を主張するものであり、マスメディアや弁護士など、新たなクレイム申立者の多くがそれを支持したことがその文脈となっていた。こうした風潮は、「不登校」の医療化の中心にあった児童精神医学会においても同様であり、そう

した子どもを「病気」とは考えないという風潮は、90年代に至るまで支配的だった。

しかし90年代半ばを過ぎると、これに変化が起きる。それは学齢期を過ぎてもなお家から出られない青年への注目としてはじまった。この関心は静かにはじまり、持続したが、大きな転機は世紀が変わったときに訪れた。2000年に、いくつかの猟奇的な犯罪事件の容疑者が「ひきこもり気味」と報じられたことで、「ひきこもり」は時代を象徴する現象として一気に脚光を浴びることになったのである。

本研究課題にとって重要な知見は、その際、「ひきこもり」の専門家として登場した精神科医たちは、同時に、犯罪者の精神分析をも行うことで、両者を巧妙に接続したことにある。反社会的行為としての「犯罪」と非社会的行為としての「ひきこもり」は、精神医学の専門知により出会い、その状態への危機意識が煽られることとなった。そのことにより、一方では「当事者」やその家族へのいわれなき偏見が強化され、他方では、行政における明確な対処のターゲットとされ、それは厚生労働省における管轄下におかれた。こうして「ひきこもり」は、その社会問題化の当初において「精神医療問題」としての側面が強調されたのだ。

「ひきこもり」を精神医療問題とする見方は、2004年頃から注目された「ニート」という「労働問題」カテゴリーの登場で、一旦は「脱医療化」の方向に動くかに見えた。しかし折からの不況や、公的社会保障制度への不安が煽られたことも手伝って「ニート」への自己責任を問う風潮が次第に強くなると、ふたたび「精神医療」問題としての色合いを強めることとなる。とりわけ厚労省の対応の文脈においては、「メンタルな問題のあるひきこもり」「ないニート」といった杓子定規な線引きが支配的になった。同時に、2003年に行政のガイドラインが出たことで「一段落」の感が広まったこともあって、「ひきこもり」に関わる人々の中には、「過去の問題」になりつつあるのではないか、という懸念を持つ者もあった。そうした人の多くは、「ニート」に集中投下される社会的資源を見て、取り残され感があったことが、多くの報道や雑誌記事などからうかがえる。それは結果として、みずから「精神医療」カテゴリーを持ち出す傾向としてもあらわれることになったのだ。

以上のように「ひきこもり」は「精神医療」しての色合いを強く持ちながら、しかしそもそもが「(精神の) 病気ではない」ことが構成要件となっていることもあり、完全にそれとして包摂されることもないままに、揺れ動いてきた。この「所在なさ」は、「ひきこもり」への対応に当たっている各地の保健所や精神保健福祉センター、民間支援団体において、個別ケースの見極めを第一義的な課題とするような、きわめて「臨床的」対応を引き出しているという点が重要な点であろう。「ひきこもり」概念のもつこの「曖昧さ」と、それに起因する「現場」における対応の多様性は、工藤がほかの研究者たちと著した書籍全体の重要な知見であり、この現象についての社会学的知見として、独創的なものと言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 田間泰子、「出産のノーマライゼーションと助産師」、『女性学研究』、16、2009、74-106（査読無）
② Yukio MIYAWAKI, Constructing a New Imagined Space: Idioms of Alien Cultures in the Ayana Possession Cults of the Hor in South Omo, Nilo-Ethiopian Studies, 13, 2009, 17-32（査読有）
③ Yukio MIYAWAKI, Purity and Heterogeneity: Warfare, Ethnic Identity, and Resistance against the State among the Hor of Southwestern Ethiopia, Nilo-Ethiopian Studies, 12, 2008, 61-74（査読有）

〔学会発表〕（計１件）
①田間泰子、社会学から見た出産―比較社会研究の視点から、第三回正常出産研究会、2008年11月29日、大阪薬業会館

〔図書〕（計５件）
①荻野達史・川北稔・工藤宏司・高山龍太郎、ミネルヴァ書房、『「ひきこもり」への社会学的アプローチ　メディア・当事者・支援活動』、2008、295（48-96）
②綾部恒雄、福井勝義、竹沢尚一郎、宮脇幸生（編著）、明石書店、『講座　世界の先住民族　ファースト・ピープルズの現在　05　サハラ以南アフリカ』、2008、394（22-46, 127-146）
③中河伸俊・平英美、世界思想社、『新版 構築主義の社会学』、2006、369（285-328）
④田間泰子、世界思想社、『「近代家族」とボディ・ポリティクス』、2006、299

６．研究組織
(1)研究代表者
中河　伸俊（NAKAGAWA NOBUTOSHI）
大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：70164142

(2)研究分担者
田間　泰子（TAMA YASUKO）
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：00222125
宮脇　幸生（MIYAWAKI YUKIO）
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：60174223
工藤　宏司（KUDO KOJI）
大阪府立大学・人間社会学部・講師
研究者番号：20295736